

# Essay

Sapiarc.com

2014年6月15日(2014-01)

## ゾクゾクするとき

昨年11月21日に書いてから、エッセイを書くことから遠ざかっていたが、それにはいくつかの理由があった。一番大きな理由は、何を書いても結論が悲観的になってしまうことだった。その状況は今でも余り変わっていないのだが、そうはならない題材が見つかったとき、書き続けることにした。これは、書くことによって、自分自身の気分を引き立たせるためだ。

誰でも、いろいろなことに「ゾクゾクするとき」があるはずだ。身近なことでは、素晴らしいスポーツの演技を見たときなどに感じるのではないか。テレビで見ている、「鳥肌が立つ」などと言われるような演技は、その後もよく憶えているものだ。実際にそれを演じた人にとっては、一生忘れられないものだろう。トリノ冬季オリンピックの女子フィギュアスケートで、荒川静香選手が金メダルに輝いたときの演技などは、その代表的なもので、神様が彼女についていたとしか思えない完璧さだった。ああいう演技は2度とできないことは彼女にはわかっていたので、あの後直ぐに引退したのだろう。それは賢明なことだったと思う。

科学の研究においても、「ぞくぞくするとき」がある。これは、スポーツの演技とは違って、それをしている本人にしか味わえないことが普通だ。他人がした研究で、こういうことに自分が出会えていたら、素晴らしかっただろうと思うことはあるが、残念ながら、それは、スポーツの演技のように広く知れ渡るといったものではない。

研究者としての出発時に、私は必ずしもツイていなかった。しかし、大学院修士課程1年の半ばから、指導教員だった島内武彦先生が大まかに出された研究課題について、自分で何をするかを選択できるようになってから、かなり幸運に恵まれた。そのなかで「ゾクゾクするとき」を何回か経験し、それによって、科学研究というものの面白さを体得したと思っている。

1961年ごろ、当時の小さくて遅いコンピューター（電子計算機という呼び方が普通だった）で計算した結果が、それまでに言われていたことが明らかに間違っていることを示したことがあり、それは動かし難いものだということが、私には直ぐにわかった。小さなことかもしれないが、自分だけが「真実」を見つけたと思って、ゾクゾクするほど嬉しかった。ところが、その直ぐ後で、当時シェル石油会社の研究所にいたRobert G. Snyder氏から島内先生に手紙が来て（島内先生はアメリカでSnyder氏に会われたことがあった）、Snyder氏は、私とは少し違った計算の仕方でも、同じ結論に到達していることがわかった。これはショックだった。Snyder氏も私たちも、この結論をそれぞれ論文にして発表して、この結論は広く認められることになった。私は、1962年にSnyder氏が来日したときに、初めて会い、それ以来ずっと親しくしていたが、彼は2006年に亡くなった。彼は私よりも10歳近く年上だった。

世界は広く、同時に同じような研究をしている人がどこかに居るといことは、その後何回も経験した。1980年代の前半のことだが、こ

ういう計算は、私たちにしかできないと思っていたことを、博士課程の院生にしてもらっていたところ、事実上同じことが、カリフォルニア大学バークレー校の Richard A. Mathies 教授の研究室から論文として出てしまったことがあった。これには驚くと同時に、困った。何故なら、既に誰かが出したものと同じような内容の論文を出すことは普通できないからだ。

しかし、気を取り直して、Mathies 氏らの論文をじっくり読んだところ、私が一番重要だと思っていたことが書かれていないことがわかった。私は「しめた！」と思って、普通ではない形で「ゾクゾクするとき」を経験した。それで、急いで、こちらの研究結果をまとめて、雑誌に投稿した。こういうときの論文の書き方には、特別な注意が必要で、Mathies 氏らの論文を無視したり、貶したりしてはならない。彼らの論文の存在は十分認めたくえで、こちらの主張をハッキリさせることが必要になる。

私たちの論文は、投稿した雑誌に直ぐに掲載された。おそらく、原稿査読者のひとりには Mathies 氏であったろう。彼から、この件についてとくに連絡はなかったが、その後、彼が書いたものを見ると、こちらの主張を完全に取り入れていたので、彼が、こちらから学ぶべきものがあることを認識したことは明らかであった。Mathies 氏とは、それ以来親しくなり、私が 2011 年秋に訪米したときにも、バークレーに行き、彼と昼食をともにした。このときのこと、2011 年 11 月 7 日付けのエッセイに書いた。Mathies 氏は、私よりも 10 歳ぐらい年下だ。

私は、去る 4 月に、現時点でパソコンとしては最高の性能をもつもの入手して、SAPIARC 研究室に置いて、計算だけのために使えるようにした。これは、デスクトップパソコンとしては最高のものを、これ以上の計算スピードは出せないというところまでカスタマイズしたものだ。中央演算処理装置(CPU)には、Intel 社の現時点で最速のものを使い、補助記憶装置には普通のパソコンに使われている HDD(Hard Disk Drive)ではなく、SSD(Solid State Drive)を使っている。感じとしては、10 年ぐらい前のスー

パーコンに十分匹敵する性能を持っているのではないかと思う。これを使って、これまでしていたと思っていた計算を既にいくつかしたのだが、まだそれらの結果を十分に解析していない。それをすれば、ゾクゾクするようなことが見つかるはずだと思っている。

ある先輩教授が、「研究をするということは、附子(ブス)を食べるようなものだ」と言われたことがあった。「附子」というのはよく知られた狂言の題目だ。毒だから近寄ってはいけないと言われたものが実は甘くて美味しいものだとわかって、全部食べてしまうという筋書きだ。先輩教授が言われたことは当たっていると思う。研究するという行為を止めることは難しいのだ。私は、上記の宝物のようなパソコンを駆使して、できるだけ多くの附子を見付けて、ゾクゾクしたいと思っている。(おわり)